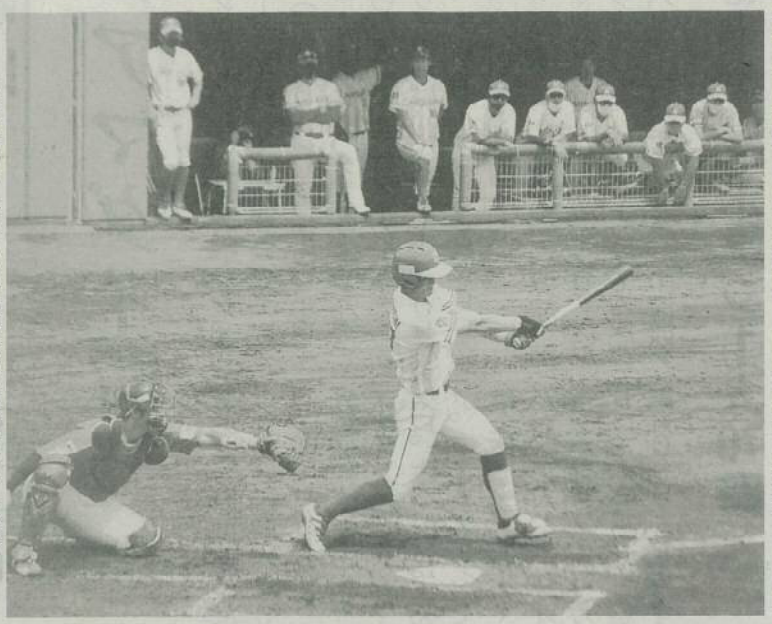
挽回の1年 目指すは「連覇」

クラブ野球選手権 マツゲン箕島 ㊤

社会人野球のクラブチーム日本一を決める第45回全日本クラブ野球選手権（毎日新聞社、日本野球連盟主催）が29日から3日間、岐阜市の長良川球場などで行われ、県からマツゲン箕島硬式野球部が西近畿代表として出場する。2020年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で初めて大会が中止されており、19年に5回目の優勝を果たしたマツゲン箕島は「連覇」を目指し、苦難を乗り越え臨む。

【加藤敦久】



大会に備え、練習試合で実戦感覚を養うマツゲン箕島の選手ら。打者は山口輝選手―いずれも有田市で

19年にチーム名を「和歌山箕島球友会」から「マツゲン箕島」に変え、8月のクラブ選手権も2年ぶりに制した。しかし、その後に試練が待っていた。

コロナで中止

新型コロナの影響で20年5月のクラブ選手権、7月の日本選手権本大会が中止に。そんな中、満を持して臨んだ同年7月の都市対抗野球は、大阪・和歌山1次予選で2―4で惜敗した。同じクラブチームで、それまでの対戦では圧倒してきた相手だっただけに落胆は大きかった。「チャンスは作ったが、次の打者の打球が野手の正面をついてしまう。どんどん焦って、そのまま挽回できなかった」と西川忠宏監督(60)。敗因を分析するミーティングを重ね、挽回の機会を待ったが、コロナによる経済活動の停滞は社会人野球にも影を落とし、活動を縮小するチームも現れ始めていた。

まさかの敗戦後 強豪、プロと練習試合

西川忠宏監督

選手を増強

チーム指導部も危機感を抱いていたが、支援企業からは力強い励ましが届いた。全選手が働いているのが、スーパーマーケット事業を展開する「松源」。シーズン終了後、新加入選手と同じ数だけ在籍選手が引退するのが通例だが、同社の桑原太郎社長が西川監督に言った。「今年は大会が中止になることが多かった。ここで辞めたら選手は悔いが残るはず。現役を続けたい選手にはもう1年、やらせてあげよう」。21年の新シーズンに10人の新人が加わった一方、引退は故障などを理由にした3選手だけ。部員は7人増え、クラブチームとして大所帯の39人になった。

20年まで練習試合は大学相手が主体だったが、全国の強豪企業やプロ野球の2軍チームとの対戦を増やすなど、21年から取り組み始めたこともある。西川監督は「好打者、好投手と対戦すれば、どう攻略するかを考える機会になる。結果が出れば自信もつく」と狙いを説明する。支援者や地元のファンの高まる期待。「簡単にはいかないと思いますが、今大会は優勝しかないと思っています」。更なる飛躍の足がかりにするべく、西川監督は力を込めた。